

## 白人であることへの気づき

## —ヨーロッパ系トリニダード人の自己認識に関する談話分析—

White awareness

—European-descended Trinidadian identity discourse—

伊藤 みちる<sup>1</sup><sup>1</sup>大妻女子大学国際センターMichiru Ito<sup>1</sup><sup>1</sup>International Center, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：白人性、オーラル・ヒストリー、トリニダード、カリブ海

Key words : Whiteness, Oral history, Trinidad, the Caribbean

## 抄録

本稿は、旧英領カリブ海地域のトリニダード島を例に、ヨーロッパ系白人のアイデンティティとしての白人性構築過程の一端について、いつどのような環境でヨーロッパ系白人として認識し、それがどのように白人性の構築に関係しているのか、オーラル・ヒストリー理論をもとに考察した。2017年8月と2018年2月の現地聞き取り調査で入手した語りの分析から明らかになったのは、①他の社会構成員とは身体的特徴や社会階層が違うという認識、②植民地時代の奴隷貿易・奴隷制の当事者であるとする、他者から強要された「悪者」としての認識、③身体的特徴や「悪者」とされていることを理由とした嫌がらせやいじめ、これらの認識と経験がヨーロッパ系白人の白人としての認識を強めているということである。

## 1. はじめに

本稿は、執筆者の先行研究<sup>[1]</sup>に引き続き、カリブ海地域の旧英領トリニダード島に焦点を当て、ヨーロッパ系白人のアイデンティティである白人性の探求を続けるものである。トリニダードにおいて、植民地時代にヨーロッパから移住してきたヨーロッパ系白人については、非人道的な奴隷貿易・奴隷所有から莫大な富を形成したとされ、現代でも好意的に見られることは少ない<sup>[2]</sup>。他方で、1962年に英国植民地支配からの脱却を果たしてから、植民地時代に被支配層であったアフリカ系やインド系市民が政権を担うようになって、社会におけるヨーロッパ系白人の存在感は植民地時代と変わらず依然として強い<sup>[3]</sup>。

2019年現在、トリニダードの総人口比に対し0.7%<sup>[4]</sup>しか存在しないヨーロッパ系白人についての文化人類学、社会学の研究は、特に英国から独立した1962年以降、管見の限り多くは存在しない

<sup>[5]</sup>。そのなかで、1969年に西インド諸島大学社会経済研究所が実施した民間セクターにおける人種差別調査の結果<sup>[6]</sup>は、特定の社会構成員が就職や昇進などの面で優遇される人種差別が存在すると主張する世論を裏付けた。トリニダード・トバゴ商工会議所に加盟する374社における取締役の肌の色を問うた質問には233社が回答し、そのうち78%にあたる183社の取締役の肌は白い、つまりヨーロッパ系白人であると明らかにした。多くのヨーロッパ系白人は、植民地時代から何世代にもわたり相続されてきた土地や金銭、人脈などの財産をもとに起業し成功を収めている。このように植民地時代の伝統的なエリート層の子孫が現代社会の経済を牽引することにより国家レベルの対外政策や国内政治にも大きな影響を与え続けている。なお2019年12月現在、トリニダード・トバゴ議会には、ヨーロッパ系白人議員としては一人のイギリス系白人議員が存在するのみである。

1976年に制定されたトリニダード・トバゴ共和国の憲法は人種や信条による差別を禁止している。人種差別の存在を否定する政府主導の人種関係調査は行われていない。経済学・政治学・社会学的見地からの先行研究<sup>[7]</sup>は、植民地時代から続いているヨーロッパ系エリート層が現代社会へ与える影響について言及してはいるが、データを用い客観的数値で説明することはできていない。また植民地時代から近年まで、植民地時代からの土地譲渡や売買、トリニダード上陸人数や渡航元の記録が不完全である<sup>[8]</sup>こともヨーロッパ系白人のトリニダード社会における実態を把握することを困難にしている。他方で、19世紀初頭よりインドや中国から移住してきた年季契約労働者については、寄港地での様子や航海中の出産・死亡に至るまでほぼ完全な記録が残されている<sup>[9]</sup>。

トリニダード社会構成員のうちヨーロッパ系白人に関する先行研究だけが僅少であることは、アフリカ系<sup>[10]</sup>・インド系<sup>[11]</sup>・中国系<sup>[12]</sup>市民など他社会構成員に関する歴史・社会研究が盛んに行われている状況とは対照的であり、トリニダード社会におけるアンバランスな歴史・社会観を生み出している。そのため現在のトリニダード社会におけるヨーロッパ系白人への包括的な理解を深めるため、アフリカ系やインド系などの非ヨーロッパ系市民と共に構成している複合的な社会階層・社会階級を理解し、その中で経験する人種的・文化的軋轢について探求することが重要だと考える。

したがって本稿では、その目的を達するため、トリニダードのヨーロッパ系白人と他の社会構成員との相関関係と階層意識、ヨーロッパ系白人としての生活実践や実態を捉えたい。本稿ではヨーロッパ出身のトリニダードに住む白人を「ヨーロッパ系白人」とし、その中でも3世代以上カリブ海地域に住む人々を研究対象とする。その際、2017年8月と2018年2月にトリニダードにおいて、オーラル・ヒストリーとして聞き取った当事者の語りを分析しながら考察するという方法で行う。

## 2. 背景

### 2.1. トリニダードの多民族共生社会

南北アメリカ大陸に囲まれ、大西洋へと開いているカリブ海南端に位置するトリニダードは、スペイン領であった15世紀末から始まった植民地

政策により開拓が細々と始まった。1783年からは、プランテーション経営による植民地経済活性化のため、カトリック同盟国であったフランスからの移民を積極的に受け入れた。その結果、近隣フランス領カリブ諸島からプランテーション領主たちが、所有する奴隷と共に大挙して押し寄せ、フランス革命戦争開始直後からはフランス本土から貴族たちも逃れてきた<sup>[13]</sup>。そして1797年に英国領土となってからは、アフリカからの奴隷やインド・中国などからの年季契約労働者が導入され、植民地としての開発が進んだ。さらに19世紀後半から20世紀前半にかけて現在のシリア・レバノン周辺よりオスマン帝国によるキリスト教徒弾圧から逃げてきた人々も加わった。その中でヨーロッパ系白人は、社会の中で絶対的存在の少数派であり続けてきた。特に1962年に英国から独立して以降も、彼らは社会的・文化的強者として、アフリカ系やインド系などの非ヨーロッパ系市民と共に、多民族・多文化共生社会を築いてきた<sup>[14]</sup>。

多民族・多文化共生社会とは、近年耳にするようになってきた比較的新しい言葉である。本稿では、様々な民族がお互いの文化の違いを尊重しつつ、民族間の紛争・内戦を起こさずに平和的に共存している社会と定義する。同じく旧英領であるフィジーやスリランカ、南アフリカやマレーシアも多民族社会であるが、民族間の紛争<sup>[15]</sup>や、特定の民族に対する優遇策<sup>[16]</sup>の導入を経験し、社会を構成するすべての民族が平等に平和的に共生しているとは言いがたい。トリニダードにおいては主に、植民地時代、圧倒的な権力により搾取し続けたプランテーション領主のヨーロッパ系白人と、奴隷や年季奉公労働者として搾取され続けた非ヨーロッパ系市民の人々の子孫が、1962年の英国からの独立以来、現在に至るまで、一切の民族間紛争も起こさずに多文化共生社会を成功させている。

2011年に実施された人口調査<sup>[17]</sup>の結果によると(表1.)、本稿で取り上げるヨーロッパ系市民は、トリニダード総人口の0.7%を占めることがわかる。2000年の人口調査<sup>[18]</sup>の結果(表2.)と比較すると、ヨーロッパ系市民の人口増加が見られるが、何よりも顕著なのは自身の人種/民族の属性を明らかにしない者が大幅に増加したことである。「混血(その他)」への属性を表明しないことから、自身の人種/民族の属性が不明なのではなく、あえて自

身の属性を与えられた選択肢から選択しないのではないか。その背景は本稿で議論する余地はないが、クレオール化が進む多民族共生社会における現象として後続研究としたい。

表 1. トリニダード人種/民族別人口 (2011)

| 人種/民族            | 人口               |
|------------------|------------------|
| アフリカ系            | 400,737          |
| インド系             | 466,980          |
| ヨーロッパ系           | 8,215            |
| 中国系              | 3,952            |
| シリア/レバノン系        | 1,013            |
| 先住民              | 1,328            |
| 混血 (アフリカ系+インド系)  | 98,769           |
| 混血 (その他)         | 197,950          |
| その他              | 2,200            |
| 記載なし             | 80,665           |
| <b>トリニダード総人口</b> | <b>1,261,811</b> |

表 2. トリニダード人種/民族別人口 (2000)

| 人種/民族            | 人口               |
|------------------|------------------|
| アフリカ系            | 418,268          |
| インド系             | 446,273          |
| ヨーロッパ系           | 7,034            |
| 中国系              | 3,800            |
| シリア/レバノン系        | 849              |
| 混血               | 228,089          |
| その他              | 1,972            |
| 記載なし             | 8,487            |
| <b>トリニダード総人口</b> | <b>1,114,772</b> |

このように混血が進む多民族共生社会を展開するトリニダードにおいては、特定の人種・民族を優遇・冷遇することが法律で禁止されている<sup>[19]</sup>。街ではカトリックやスピリチュアル・バプティストの教会、イスラム教のモスクやヒンドゥー教のマンディールが軒を連ね、搾取してきた側と搾取されてきた側が、少なくとも表面上は、平和的に共存している社会が展開されている。

## 2.2. 「白人の優位性」

一方で 21 世紀の現代社会においても、植民地時代と変わらず、富や機会の分配に関して、肌の色

に基づく不平等が見られる。トリニダードにおいては、植民地時代にヨーロッパ系白人のプランテーション領主が、主にアフリカ系やインド系の労働者に対し、自らの社会的・経済的特権と優位性を強調し、強制してきた<sup>[20]</sup>。そのため「白人は裕福で優れていて特別な存在」という感覚は非ヨーロッパ系市民のヨーロッパ系白人に対する価値観や精神として現代まで受継がれている<sup>[21]</sup>。

この「白い肌」の有利さを示すものとして、トリニダードやカリブ海地域のみならず、ヨーロッパ列強による植民地支配を経験した多くの地域では、社会的優遇を求めて化学物質を用いて肌の漂白を行うという流行が見られる<sup>[22]</sup>。ジャマイカ<sup>[23]</sup>やアフリカ諸国<sup>[24]</sup>、またインド<sup>[25]</sup>での肌の漂白の事例と漂白を原因とする健康被害についての報告は後を絶たない。このことから明らかなように、ヨーロッパ諸国の植民地支配を受けた地域では、健康を害しても白い肌を求める風潮があり、それは肌の色が白ければより良い機会を得られるかもしれない社会が構成されているからである<sup>[26]</sup>。このようにすべての社会構成員が平等とされる現代社会においても、実際にはヨーロッパ系白人やそれに似た身体的特徴を持つ者が優遇され、優位にあると考えられている<sup>[27]</sup>。

## 2.3. 白人性

このヨーロッパ系白人の優位については、白人性として 90 年代から盛んに研究が行われてきた<sup>[28]</sup>。白人性は、白人自身のアイデンティティとして、非白人に対する根拠のない差異を認め、それを元に差別化を行い、白人が自分自身の優越性を信じ込むものである<sup>[29]</sup>。そして多くの場合、白人性には社会的・経済的特権が付随するものと考えられている<sup>[30]</sup>。

### (1) アメリカ合衆国の事例

2016 年には白人至上主義者で人種差別容認派といわれるトランプ・アメリカ大統領が誕生した。ベストセラーとなった J・D・ヴァンスの『ヒルビリー・エレジー』<sup>[31]</sup>や、朝日新聞記者の金成隆一によるアメリカ中西部～中部における白人労働者に関する継続的報道<sup>[32]</sup>は、白人至上主義的でグローバル化や移民増加を悪とするトランプ氏に、白人労働者階級の熱狂的な支持がなぜ集まったのかを



理解する基礎となった。これに関連し、南は白人労働者の生活世界が形成・維持されてきた歴史の重要性を示した<sup>[33]</sup>。これらの文献が指摘するのは、白人労働者の「白人を差し置いて非白人がいい思いをする」ことに対する反発と、白人（労働者）の価値観への脅威である。つまり白人労働者にとって、白人が持つべき社会的・経済的特権が失われるという脅威が彼らの不安となり、それを煽ったトランプ大統領が彼らの支持を得たのである。

### (2) トリニダードの事例

しかしこのアメリカ合衆国の白人性の概念は、トリニダードをはじめとするカリブ海地域のヨーロッパ系市民には適用できない。ブレトン<sup>[34]</sup>やデ・ヴァタイル<sup>[35]</sup>などによるトリニダードにおけるヨーロッパ系市民の歴史研究によると、ポルトガル系などの農業移民は、ヨーロッパ出身で「白人」ではあるものの、移住当初は必ずしも社会階層の高位には位置しなかった。しかし次第に、フランス系やイギリス系などから構成されていた現地エリート層との婚姻や経済的成功をきっかけとして社会階層を昇っていき、現在はエリート層と同意義のヨーロッパ系市民となったとされる。つまり現代のトリニダードの白人社会は、労働者階級が存在するアメリカ合衆国の白人社会とは全く異なる。トリニダードにおける白人性は、「白人」であるだけで自動的にエリート層に属することができ、社会経済特権を享受できるものと定義できる。なおかつ、そのアイデンティティは、ヨーロッパ系白人のみの世界で完結するものではなく、社会多数派であるアフリカ系やインド系等非白人との日常的な交流などにより認識されるものと言える。

### (3) バルバドスの事例

ではカリブ海全域にトリニダードで見られる白人性が共通して存在するののかというと、それも違う。トリニダードと同様に1960年代にイギリスから独立したバルバドスにおける白人性について、ジョーンズ<sup>[36]</sup>やベクルズ<sup>[37]</sup>の歴史研究は、17世紀初頭のバルバドス入植開始時から導入されたアイルランドからの白人奴隷と呼ばれる労働者が現地の白人社会を二極化していたと指摘している。この指摘通り、バルバドス社会のヨーロッパ系コミュニティがエリート層と貧困層に分かれていることは、2017年と2018年に執筆者が現地で聞き取

り調査を行った際にも明らかであった。そのため現在もバルバドスにはプアー・ホワイトと呼ばれる極貧のヨーロッパ系市民とエリート層に属すヨーロッパ系市民が存在するように、ヨーロッパ系市民であれば自動的にエリート層に属することができるトリニダードと同じ白人性は存在しない。

### (4) カリブ海の他地域の事例

トリニダードやバルバドスが経験したイギリスの植民地支配を経験したことのない他カリブ海地域では、上記で挙げたアメリカ合衆国、トリニダード、バルバドスとはまったく異なる白人性が展開されている。例えば、アメリカ合衆国の自治連邦領であるプエルトリコは、かつてカリブ海地域で最も急激な人口の白人化が起こり、アメリカ合衆国人口調査によると、2000年には80.5%<sup>[38]</sup>のプエルトリコ島民が「白人」であると認識していた。そしてなぜか2018年には68.2%と激減したが<sup>[39]</sup>、現在においても最も白人率が高い島のうちのひとつである<sup>[40]</sup>。急激な白人化に加え、近年の白人率の激減が人口学的に不可能であることは、多くの研究者が指摘している<sup>[41]</sup>。先行研究は、この現象の要因として、人口調査時の黒人（アフリカ系）と白人の混血「ムラート」枠など人種カテゴリーの増減や定義変更、またスペイン統治時代から人々の意識に存在する“limpieza de sangre (purity of blood)”，つまり白人としての純血性を重視する風潮、そしてより白い肌の子どもを生み出すことを「人種の改善」と奨励する価値観などを挙げており、これらが自らを「白人」枠に区分する認識を助長しているとする<sup>[42]</sup>。このように白人の人口割合や「白人」の定義、また社会少数派ではない白人に付随する社会特権の大小など、プエルトリコの白人性は本稿で取り上げるトリニダードの白人性とは明らかに異なる。

カリブ海地域のフランス海外県であるグアドループやマルティニークは、アフリカ系と混血（アフリカ系・ヨーロッパ系・東インド系）が人口80%を締め、「白人」は5%である<sup>[43]</sup>。このフランス海外県住民である「白人」の背景は様々で、少なくとも①植民地時代に入植し、奴隷所有により莫大な富を築いた者の子孫、②植民地時代に労働者としてアフリカ人奴隷と共に働いていた者の子孫、③フランス本土からの業務都合による赴任者、④温暖な気候を求めヨーロッパから移住してきた退

職者といった区分が可能である。トリニダード・トバゴやジャマイカ、ハイチなどの、宗主国から独立を果たした国においては、21世紀現在、警官や公立学校教員などの公務員に「白人」はまず存在しない。しかしフランス海外県には本土から「白人」公務員が赴任し、例えば公立中学校教員として次の転属辞令まで現地出身のアフリカ系や混血の教員と同待遇で働くのである。執筆者の知人であるフランス本土からマルティニークの公立小学校に転属した「白人」教員は、休暇で近隣カリブ海諸国を訪問した際、現地の人々が自分を王様のように接遇するため、理由もなく優れて偉くなった気分になったと驚いていた。実際にはマルティニークでは人種間における機会の不平等是正を求めた非白人によるデモが行われた報道<sup>[44]</sup>があるが、フランス海外県の「白人」よりも、他のカリブ海地域の「白人」の方が無条件で社会特権を享受できる社会であることが垣間見える。

以上、カリブ海地域の白人性が、アメリカ合衆国中西部の白人性はカリブ海地域のそれとは全く異なるように、白人性の概念は地域によって、また時代によって、全く異なるのである。カリブ海地域内でもトリニダード、バルバドス、プエルトリコ、マルティニークはそれぞれ異なる白人性を構築している。これらの異なる白人性の共通項は、社会科学において人種は社会的構造物にすぎないという認識が広がってからも、意図的にもしくは無意識に、優性としての「人種」に固執し、社会的特権を追求してきたことである。その社会的特権として代表的なものは、文化的支配である。特権を持つ側の文化が優位で正常であるとする一方で、特権を持たない側の文化が劣勢で異常であるとして、差別され抑圧されてきた。本稿の、トリニダードのヨーロッパ系白人の白人性に向けた探求心は、植民地時代から続く非ヨーロッパ系市民への理不尽で不当かつ不平等な仕打ちを正当化する白人性理論と、その白人性構築と再構築を可能としている様々な影響を、ヨーロッパ系白人と非ヨーロッパ系市民の相互行為分析という視点から実証的に明らかにしたいという考えが基盤となっている。

#### 2.4. 「白人」とは誰か

白人とは誰を指すのかという問いには、前項で見てきたように、時と場所により答えが異なっ

くる。例えば、21世紀現在の日本では一般的にはアイルランド人もイタリア人も「白人」とされる。しかし、19世紀後半や20世紀前半のアメリカ、オーストラリアにおける移民制限法<sup>[45]</sup>や白豪主義政策<sup>[46]</sup>の下では、彼らはその他の「白人」と同等の扱いはされなかった。さらに現在も身体的特徴は金髪碧眼に白い肌で「白人」に見える人物でも、一人でも非白人の父祖がいた場合には白人とは見なされない米国の地域もある<sup>[47]</sup>。

トリニダードにおいては、ヨーロッパに父祖を持たない、20世紀初頭に現在のシリアやレバノン辺りからやってきた移民も、彼らが持つ白い肌などの身体的特徴と経済力から白人として認識されることもある<sup>[48]</sup>。さらに近年、中南米の政情不安から移民が増加しており、特にベネズエラからの移民は相当数に上ると見られている<sup>[49]</sup>。その中南米の移民も、白い肌などの身体的特徴から、白人と認識されることもある<sup>[50]</sup>。しかし彼らは、独立以前にヨーロッパよりトリニダードに移住してきた人々とは、トリニダード社会における歴史や文化的・経済的役割などが異なるため、社会における経験も異なるはずである。本稿が「白人」ではなく「ヨーロッパ系白人」という言葉を使うのはそのためである。そうすることで、トリニダードにおいては時に白人とされる近東系市民と中南米系市民を研究対象として排除している。

### 3. 方法

#### 3.1. オーラル・ヒストリー

本研究は、個人の経験に基づく語りから史実を記録することができるオーラル・ヒストリー手法に則った聞き取り調査に基づくものである。それはオーラル・ヒストリーが「複雑で多面的な現実をたいして、複眼的な視点から歴史を再構築」<sup>[51]</sup>できるからである。トリニダードのヨーロッパ系白人に関しては、実態・実践に関しても蓄積が極めて浅いため、まずは彼らが経験した史実・事実を記録する。それによって、彼らの生活実践や実態の事例が明らかになる。そうすることで、植民地時代や独立後の社会における異文化や他の社会構成員との相関関係を通じて、彼らがどのような「人種」観念や社会階層概念などの経験を持ち、それがどのように彼ら個人の白人性構築に影響を与えてきたかを捉えることができるのである。そのため本研究では個人の経験が歴史叙述として重視さ

れるオーラル・ヒストリー法を選択した。

オーラル・ヒストリーとライフ・ヒストリーは同義的に用いられることもある、1980年代から注目されている質的調査法<sup>[52]</sup>である。個人が聞き手とのコミュニケーションを通じて、過去の出来事や自身の経験について語る際に得られる資料である点では違いはない。しかしオーラル・ヒストリーは、ライフ・ヒストリーと同様に、個人の人生における出来事や過去の経験についての語りに焦点を当てるが、研究の関心となるのはその個人が語る出来事が起こっていた過去の社会であり、その個人の人生や生活ではない<sup>[53]</sup>。本稿と同じくカリブ海地域をフィールドとしたライフ・ヒストリーの代表的な研究としてシドニー・ミンツの *Worker in the Cane: A Puerto Rican Life History*<sup>[54]</sup>が挙げられる。この研究でミンツは、プエルトリコのサトウキビ畑で働く一人の男性に焦点を当て、彼のライフ・ヒストリーの語りから、サトウキビ労働者としての経験とプエルトリコ社会の変容を明らかにした。

しかし本稿は、トリニダードのヨーロッパ系白人が、生まれたときから現在までに、どのような時（時代）にどのような経験をしてきたかという語りの中の、彼らの白人性が構築される過程に注目している。そのため、ライフ・ヒストリーではなく、オーラル・ヒストリー法を採用した。ある過去の一点における個人の経験だけに焦点を当てるのではない。ある人物の個人の経験と、その人物がその経験をした「時代」の歴史的、そして社会的背景に同時に焦点を当てるのである。こうすることで、英国からの独立以降、歴史に記録されてこなかった、今まで声が聞かれることのなかった、絶対的存在の少数派であるヨーロッパ系白人の「個人と歴史が交錯する経験の語り」<sup>[55]</sup>に大きな意義を見出すことができる。

### 3.2. 現地調査

#### (1) 聞き取り調査概要

##### a. 対象

聞き取り調査対象者は、3世代以上カリブ海地域に住むトリニダードの18歳以上の男女で、ヨーロッパ系白人であると自己認識し、他者からもそう認識されている人物である。特別な配慮が必要となる17歳以下の子どもは調査の対象としてい

ない。

##### b. 聞き取り調査参加者の選択

本研究のための現地調査を行う前から、先行研究のための調査で出会った方々など、現地のヨーロッパ系白人コミュニティには既に知人が存在していた。そのため執筆者は、その知人の知人を紹介してもらってネットワーク抽出を行い、聞き取り調査の参加者を募った。

2017年8月と2018年2月の現地調査では、合計8日間を聞き取り調査に費やし、合計13人から「語り」を入手した（表3）。

表3. 語りの提供者（すべて仮名）

|    | 名前    | 性別 | 年齢 | 職業   |
|----|-------|----|----|------|
| 1  | ジュリー  | 女性 | 41 | 会社員  |
| 2  | マノン   | 女性 | 64 | 主婦   |
| 3  | クリステル | 女性 | 30 | 編集者  |
| 4  | スコット  | 男性 | 28 | 自営業  |
| 5  | ルーカス  | 男性 | 65 | 会社員  |
| 6  | キャサリン | 女性 | 58 | 大学講師 |
| 7  | カリス   | 女性 | 19 | 学生   |
| 8  | マーティン | 男性 | 21 | 会社員  |
| 9  | アレン   | 男性 | 39 | 自営業  |
| 10 | リアナ   | 女性 | 28 | 会社員  |
| 11 | ダミアン  | 男性 | 48 | 自営業  |
| 12 | トリスタン | 男性 | 18 | 学生   |
| 13 | ジュール  | 男性 | 22 | 学生   |

本稿では、そのうちジュリー、マノン、クリステルの語りをオーラル・ヒストリーとして再構成し、論考の対象としている。13人からこの3人を選んだ理由は、「ヨーロッパ系白人としての認識」という言葉を聞いた際、マノンは首を傾げ（わからない）、ジュリーは首を横に振り（ない）、クリステルは首を縦に強く振った（大いに賛同）からである。つまりその3人が本稿で取り上げたテーマを耳にしたときに、三者三様の全く異なる反応で、期待通り、3人の違いがはっきりした語りとなったからである。

加えて、この3人は金髪碧眼といった身体的特徴に加え、4世代以上前のトリニダード島における家族史や父祖の出身地である仏領カリブ地域やフランス本土の情報まで通じている。そのため混



血の可能性が限定され、非白人社会構成員からも「白人」以外として認識されることはなく、多民族社会における「白人」としての経験を聞くことができたからである。

さらに、ジュリーはトリニダードからヨーロッパ系白人の多くが欧米へ移住するきっかけとなったブラック・パワー運動が盛んな70年代に生まれた40代であり、マノン植民地時代を経験した60代で、クリステルはブラック・パワー運動の結果、ヨーロッパ系白人人口激減後に生まれた30代である。女性という共通項を持ちながらも、年齢差により、年代が異なればトリニダード社会における経験も異なること、つまり社会の変遷も語りから垣間見ることができたからである。

#### c. 最初のコンタクトから聞き取り調査まで

聞き取り調査に参加する可能性のある人物として最初に連絡を取りはじめたときから、以下の情報をメールにて伝達した。

- ・執筆者の人物紹介
- ・先行研究の電子データ
- ・本現地調査の概要
- ・「研究倫理遵守に関する誓約書」

加えて、聞き取り調査はデリケートな質問事項が多く含まれるため、完全な匿名性が保たれること、合意のもとICレコーダーで録音すること、録音したデータは匿名で文字起こしされること、文字起こしされた内容は英文や和文の論文に引用され発表されることを説明した。

#### d. 聞き取り調査の実施場所

調査参加者の強い要望がない限り、執筆者はカフェやホテルのロビーなど公共の場所を提案した。しかし参加者の多くは自宅で行うとことを希望したため、ほとんどの聞き取りは参加者の自宅で行われた。

#### e. 聞き取り調査枠組み

聞き取り調査は、45分から1時間の半構造化インタビュー計画を準備した。聞き取り対象者がより多くのストーリーを共有したそうにしていた時には、執筆者は調査対象者に自由にリードを取らせた。多くの場合において、その時の語りは非常に興味深く貴重な情報が含まれていた。

#### (2) 聞き取り内容

多くの場合において、聞き取り開始からまったくの緊張を見せない参加者もいたが、話し始めやすい環境をつくるためのアイスブレイカーとしての質問を必ず設けた。質問の順番は以下のとおりである。

- ①家族史（アイスブレイカー）
- ②家族の伝統
- ③教育について（どのような学校に通ったか・学校での様々な体験・先生や同級生との関係）

このころには緊張はほぐれており、執筆者に対しても打ち解けてくる。ここからさらに個人的な質問内容を続ける。

- ④子どもの有無
- ⑤結婚や配偶者の属性
- ⑥今まで交際したことのある相手の属性
- ⑦異人種間結婚と混血について

この程度までオープンに回答が進んだところで、自身のヨーロッパ系白人としての認識に関する質問を続ける。

- ⑧いつヨーロッパ系白人だと認識し始めたか
- ⑨アフリカ系やインド系の人々との交流
- ⑩今まで受けてきた人種差別
- ⑪今までしてきたと認識している人種差別など

テーマとは完全に無関係な発話でない限り、参加者の自由な発言を歓迎した。本稿で取り上げた分析テーマは⑧～⑩である。その他の質問への回答の分析については、後続研究としたい。

#### (3) 倫理的配慮

聞き取りでは個人情報も含む質問を行い、また時に人種差別や他人に対する嫌悪などの非常にデリケートな内容も含むため、聞き取り調査を行う場所については、調査参加者の意見を尊重した。

聞き取り調査の当日、筆者は調査参加者に研究内容について再度説明した。その後、機微な内容を含むと想像される聞き取りデータは執筆者以外の者がアクセスできないよう取り扱うこと、また調査参加者の匿名性は徹底して遵守されることに関し、インフォームドコンセントを徹底して行い、「研究倫理遵守に関する誓約書」に筆者と調査参

加者の二人が一部ずつ保管するよう署名を行った。

なお聞き取り調査は調査参加者の承諾を得て、ICレコーダーに録音した。録音の承諾が取れなかった者に対しては、ICレコーダーは使用せず、専らメモを取り続けた。

#### (4) 史資料収集

日本から持参したモバイル・スキャナーを用いて、聞き取り対象者所有の家系図や写真、そして手紙やメモなどの複写を行った。聞き取り調査対象者の語りに史実としての補強をしたり、語りの背景の説明を加えたりするために、聞き取り対象者が大切に保管して来た史資料は非常に重要な役割を果たす。

#### (5) 困難

現地での聞き取り参加者の直前キャンセルは数件体験した。現地では執筆者自身で何度も電話やメールで調査参加者に対しリマインドを行ってきたが、それでも直前キャンセルは避けられないこともあり、キャンセルの連絡を寄越してくれるだけ誠実であり有難いと考えるようにした。

そして聞き取り内容が、また研究テーマ自体が、ともすると現地の人種関係によい影響を与えない可能性もあるデリケートな内容であるため、懐疑的になるのも理解できる。また現代は、ヨーロッパ系市民が関わる事業や事件に何か問題が発生すると、すべてのヨーロッパ系白人が槍玉にあげられる傾向がある<sup>[56]</sup>。そのため、先行研究でも本研究でも多くの聞き取り対象者が執筆者と話している場面を現地の人々に見られたくないという希望を表明した。

執筆者は何度も、聞き取り調査で入手した音声資料は全て匿名で文字起こしされ、音声データは決して発表しないこと、また調査参加者の姿は写真や映像に収めていないし、隠し撮りもしていないため、入手した情報は対象者個人と紐つけることは不可能であることを強調した。このような調査対象者の心配から、執筆者の研究テーマが一部の調査対象者にとっては脅威であることを切に感じ、データ管理や匿名性保護の重要性に身が引き締まる思いがした。

もう少し詳しく調査対象者から話を聞いてみる

と、本稿で対象としたトリニダードではないが、近隣の島で「事件」が起こったようである。カリブ海の仏領マルティニーク島で撮影された、マルティニークの植民地時代から続く白人ブルジョア階級に関するドキュメンタリーが、隠し撮りをされた映像と共に、明らかに個人の特定が可能な編集をされて放映されたそうである<sup>[57]</sup>。フランス本土では白人が大多数であるが、マルティニークはフランス領土ではあるが白人は少数派である。そのドキュメンタリーの放映後、白人が経営するビジネスに対するボイコット運動が起こった他、小さな島の人種間の平和な関係が崩れたという経緯があったらしい<sup>[58]</sup>。

現地の規模が小さいヨーロッパ系白人コミュニティは、新たな調査対象者を紹介してもらうには便利であるが、誰が聞き取り調査に参加したかが噂になっていることもあり、匿名性を守るのは困難を極めた。

#### (6) 執筆者の立場

執筆者は1997年から断続的に現地を訪れており、特に2007年から2010年までの4年弱は駐在していた。そのため現地のヨーロッパ系白人コミュニティの一部とは既知の仲である。また執筆者が修士論文のために行った2006年の現地調査では、現地西インド諸島大学の先生方や広く学術・文化界の方々にもお世話になった。現地の関係者にとって、執筆者は顔なじみの訪問者であり、執筆者も現地社会に精通していると自負している。

### 3.3. 分析

聞き取った資料は、すべて一言一句、言いよどみや言い換え、笑いや困惑なども含めて文字化し、トランスクリプトを作成する。しかし本稿は会話分析を目的としていないため、発話の意味と意図の正確性が守られる限り、読みやすさも重視し、繰り返しや言い間違いなどを削除して編集している。また調査参加者の音声データを文字化するだけでは多くの情報が失われる。それらの情報を落とさずに、発話された言葉以外の意味をどれだけ忠実に文字化できるかということに注意する。

ポール・トンプソン<sup>[59]</sup>が挙げた、新しい解釈を発展させ、過去の歴史変化のパターンや解釈を確認し、過去の経験を人々はどのように感じたかを



表すことができる、語りが歴史叙述に持つ可能性を念頭に、出来上がったトランスクリプトについて、ヨーロッパ系白人という社会集団に焦点を当て、その中でも特に特殊な語りに注目し、そこで見られる限られた事例を掘り下げて分析を行う方法を用いる。そうすることで浮かび上がって来た各事例の背景にあるものにも注目する。そこで白人性の語りとして取り上げるのは、白人としての認識、つまり白人であることの気づきの経験である。そして個人のヨーロッパ系白人としての経験の語りにおいて、他の社会構成員とのどのような相関関係を通じて表現してきたのかにも注目する。

#### 4. 分析・考察：「白人」としての認識

トリニダードのヨーロッパ系コミュニティは、フランス貴族の子孫や、英国商人または英国植民地政府役人の子孫など、様々な背景を持つ人々によって構成されている。執筆者の先行研究は、トリニダードのヨーロッパ系白人が自身の白人純血性を重んじることを明らかにした。ここでは3人のヨーロッパ系白人が、いつ、どのような環境でその認識を持つようになったのかを提示する。

##### (1) ジュリー 40代前半 女性

ジュリーは金髪碧眼のフランス系トリニダード人である。祖父母や叔父・叔母、いとも含めた家族集合写真を見ると、撮影場所はトリニダードではないのではないかと感じてしまうほど、家族全員がヨーロッパ系白人の身体的特徴を持つ。自身も純血のヨーロッパ系白人であると主張する。

トリニダードにおいてフランス系白人は、奴隷所有と搾取を通じて巨富を築いた者たちであると認識されている。また現在はフランス語を話すフランス系は少なくなったが、18世紀末から19世紀初頭にかけては、トリニダードでフランス語が社交や法律の分野で使用されていた時期もあるほど、フランス語やフランス文化の影響力は大きかった。またフランス革命から逃れてきた王党派貴族の末裔であると主張する者も多く、例えば植民地政府下級役人など労働者階級に属す他ヨーロッパ系白人とは異なり、高貴な家系出身者であると自己紹介する者も現在も存在する。そのためフランス系以外のヨーロッパ系白人とは一線を画す。

ジュリーとは聞き取り調査より10年前に、執筆者のかつての職場を通じて知り合った。よって執筆者はジュリーの仕事内容や仕事ぶりをよく知っていたし、ジュリーも執筆者がトリニダードでどのような仕事をしてきたかを知っていた。また近所に住んでいたジュリーの両親とも、私的にも親しくさせて頂いていた。そのため執筆者は、ジュリーは属性では最高の聞き取り調査対象者であると理解していたが、その聞き取り調査では本音を語ってくれることを期待していなかった。なぜなら仕事の元関係者でもあり、私的にも親しくして、今後ともその関係性を続けていきたいと思うアジア人である執筆者相手には、例えば自らを白人至上主義者であるなどとは思われたくないであろう。また人種差別主義者的言動はしなくとも、心の中で考えていることを知られるのは、心地よいものではないであろう。そのため執筆者は、聞き取り調査を行っても当たり障りのない回答しかないであろうと予想していた。

以下に引用したジュリーの語りからは、ヨーロッパ系白人としてトリニダードで生活する者の、生々しい、しかし非常に興味深い経験を読み取ることができる。いつ自分がヨーロッパ系白人であることを始めて認識したのはいつかとの執筆者の質問に対し、迷いなく即答した。

「私が5歳のとき、幼稚園で、だわ。弟と私はスペインで生まれたの。トリニダードに帰ってきたとき、私は5歳で、弟は2歳か3歳だったはず。私たちは周りを見渡して、みんなチョコレート色の髪の毛をしていて、チョコレート色の人たち、茶色い人たちだと認識して、『茶色い友達ができた!』とコメントしたのを覚えているわ。」

Kindergarten, when I was five. We were born in Spain, my brother and I...when we came back here, I was five, my brother would have been two or three... when we looked around at all these people with their chocolate hair, chocolate people... Brown people... "I have brown friends!"

ジュリーはヨーロッパで生まれ、いわゆるヨーロッパ系白人に囲まれて5歳まで生活をした。その後、トリニダードに帰国するわけだが、ジュリー

一ははっきりと、他者との肌の色の違いを認識することで、自身がヨーロッパ系白人であることを認識した瞬間を覚えていた。またジュリーの語りから、1980年代前半のトリニダードの状況は、ヨーロッパ系白人は社会の少数派であり、周りには非ヨーロッパ系市民が多数派として存在していたことがわかる。

5歳の子どもであったジュリーは、ヨーロッパ系白人としての優越感にも社会的特権にも気づくことはなかったようである。実際に社会的特権に恵まれた生活をしていて、スペインから帰国したばかりの自分たちの生活とトリニダードのチョコレート色の人たちの生活は違うのだと感じたかもしれない。5歳でヨーロッパ系白人だと認識しはじめてから、今までにヨーロッパ系白人であることで恩恵を受けたり、嫌な思いをしたりしたことはあるかと聞いた。

「子どもの頃はなかったわね。…今働いている会社で接客もするんだけど。私が接客応対中、少し席を外したときに、あるお客さんに同僚が『誰かが応対させて頂いていますか』と聞いたことがあって。そうしたら『はい。あのきれいな肌の子に』ってお客さんが答えたらしくて！『はい、あのきれいな肌の子』…『私の応対をしてくれたあのきれいな肌の子』(笑) 私はきれいな肌の子よ!!」

Not in my growing stages... in the company we'd be helping a customer and they would say, "Yes, the clear skin girl." -Yes, the clear skin girl... "the clear skin girl that was helping me."!! (LAUGHTER) I'm the clear skin girl!

子供の頃には経験したことがない、つまり大人になってからの経験はある、と発言しながらも、トリニダードにおける大人になってからの自身のヨーロッパ系白人としての特権に基づいた体験や嫌な経験をジュリーは決して執筆者に語らなかった。上記の引用のように自身の、ヨーロッパ系白人がトリニダードで経験するエピソードを、笑い話として紹介した。ジュリーがビジネス・コンサルティング会社の職場で接客応対した顧客が、ジュリーの名前や服装でジュリーを認識していたのではなく、ジュリーの白い肌で認識していたこと、そして白人の女性 [white girl] と直接的な表現では

なく、きれいな肌の子 [clear skin girl] という表現をされたことを語った。

ジュリーは「きれいな肌の子」と表現されたことについて、非ヨーロッパ系市民はヨーロッパ系白人の肌を表現するときに、必ずしも「白」 [white] という言葉を使わないと述べた。それはヨーロッパ系白人と非ヨーロッパ系市民の植民地時代の歴史的な関係、つまり支配者と被支配者との関係、または抑圧者と被抑圧者としての関係に基づくとの意見を語った。つまり支配者であり抑圧者であるヨーロッパ系白人は非ヨーロッパ系市民にとっては憎しみの対象であったため、非ヨーロッパ系市民がヨーロッパ系白人に対し、特別な敵意は持っていないと暗示するために、あえて「白人」 [white] という言葉を使わなかったのである。言い換えると、ジュリーに接客をされていた非ヨーロッパ系の人物は、ジュリーを白人と表現しないことで、ジュリーに対する親しみとジュリーとの関係の良好さを表現しようとしているのである。

実際、現代トリニダード社会において、ヨーロッパ系白人を目の前にその人物を「白人」 [white (person, people)] と呼びかけることは少ない。多くの場合、[white] に代え、好意的には [fair] や [clear]、妬みやさげすみを込めて [pale] や [ashy] が使われる。ヨーロッパ系白人の男性に対する悪意のない呼びかけとして、[white man] や [white boy] と [white] を使うことはあるが、ヨーロッパ系白人女性が非ヨーロッパ系市民に [white lady] や [white girl] と呼ばれる時、多くの場合、揶揄や侮蔑のニュアンスが含まれる。そのためジュリーを [white] と呼ばない選択をすることは、ジュリーの心情を害すことなく、良好なビジネス関係を構築し、また特定の人種の人間に対して嫌がらせとなる政治的に誤りである単語は使用しないという自身の姿勢を主張しているのである。また植民地時代には、たとえ非ヨーロッパ系市民が顧客の立場であっても、非ヨーロッパ系市民はサービスを提供する側のヨーロッパ系白人を、[Sir] や [Madam] といった敬称を付けて呼んでいた。また逆に、ヨーロッパ系白人が非ヨーロッパ系市民に [Sir] や [Madam] といった敬称を使うことはなかったであろう。

この「白人」 [white] という言葉が持つニュアンスは、トリニダード社会におけるヨーロッパ系白

人の人口変移と共に変遷した。奴隷制下では「白人」は非白人に対する非人道的な抑圧と搾取が許されていた絶対的権力を持つ圧倒的な存在であった。1833年の奴隷制廃止から1962年の植民地時代終焉までには、アフリカ系やインド系、そして中国系の、医師や弁護士などの専門職に就く者も増えてきたが、多くの非ヨーロッパ系市民にとって、ヨーロッパ系白人は、何世紀にもわたり労力を搾取されてきた相手であるという特別な存在であり続けた。しかし70年代に入り、アフリカ系だけでなくインド系も、ヨーロッパ系白人から搾取されてきた「非ヨーロッパ系＝ブラック」として、ヨーロッパ系白人が富と機会を独占している状態の是正を求めたブラック・パワー運動が盛んになってからは、非ヨーロッパ系市民による「白人」[white]は「悪」という主張が音声化・文字化される機会は増え、その政治的妥当性は問われることなく、社会の一構成員を他構成員がバッシングする行動は黙認された。

ブラック・パワー運動を機に、ヨーロッパ系白人は、植民地時代の搾取者であった父祖から巨富を引き継ぐ「悪者」としての「白人」のイメージ改善や、注目されないことの必要性に気づいた。なぜならそれがトリニダード社会でヨーロッパ系白人として平和的生活を送るために必要だったからだ。そして多くのヨーロッパ系白人は圧倒的少数としてトリニダード社会で暮らす不安を抱き、欧米へ移住した。その結果、社会全体におけるヨーロッパ系白人の存在感が縮小し、理不尽なバッシングは弱まった。

とはいえ、数百年にわたり培われた価値観の変化は簡単ではない。植民地時代から非ヨーロッパ系白人には「白人は非白人から搾取して金持ちになった。狡いけれど白人マスターは偉いから敬わなければならない」という認識が植え付けられてきた<sup>[60]</sup>。ヨーロッパ系白人は植民地時代から特権と非ヨーロッパ系市民に対する優越性を認識してきた。これらの認識はそれぞれを精神的・心理的に束縛し続けており、完全には解放していない。そのため独立後50年以上経過した現在も、非ヨーロッパ系市民は圧倒的多数の立場であるにも関わらず、人口の0.7%しか存在しないヨーロッパ系白人の存在を脅威だと感じている。

そのような社会で、ジュリーのヨーロッパ系白

人としての気づきは肌や髪の色が違う他社会構成員に気づいたことから始まった。そして成人してからも、自身がヨーロッパ系白人であることは、他者である非ヨーロッパ系市民によって再認識させられてきた。それはジュリー個人としては関係のない植民地時代の歴史的な事実である「非人道的な奴隷主の子孫」であることの認識であり、非ヨーロッパ系市民からは差別する「悪」として認識されているという認識でもある。

執筆者がICレコーダーで録音している聞き取り調査の最中は、ジュリーは興味深くも当たり障りのない語りを展開し、他社会構成員に対する優越感や嫌悪に関する発言を一切せず、トリニダードに住む者すべては平等なトリニダード人であるとの主張を繰り返した。そして聞き取り調査を終え、彼女の自宅を出る直前、壁に掛かった従姉妹の結婚式の写真を執筆者に見せながら家族や親戚を紹介した。すると急に小声になり、ジュリーの家系は金髪ばかりなのに対し、従姉妹の結婚相手の毛髪が黒く非常に強い巻き毛であることを指摘しながら、「彼はたぶん混血なの」とささやいた。執筆者には、ジュリーの心の中に潜む、混血である可能性を小声で発言させた価値観、つまり混血であることは好ましくないから隠すべきである、という価値観こそが、彼女の本心ではないかと感じた。

## (2) マノン 60代前半 女性

マノンはトリニダードでフランス系の代表的な苗字を持つ人物で、同様に別のフランス系の家庭出身であるいとこを夫とした。マノンの生家・婚家共に、まだスペイン植民地であった18世紀後半に、トリニダード入植が記録されている家系である。したがって、生家・婚家の苗字は、大量の奴隷所有とその労働力搾取から巨富を築いた歴史を持つ家系であると認識を与える。

現在60代後半であるマノンが結婚適齢期の時代、つまり70年代前半、トリニダードのフランス系はフランス系同士の結婚が最も恵まれた結婚であったという。当時すでにトリニダードに住むフランス系の人数は少なかったため、結婚相手を探すのはとても大変だった。そのためフランス系であることが良いとする条件を緩和し、カトリックであること、ヨーロッパ系白人であることが条件



となった。そのような時代、つまり 60 年～70 年代のトリニダードの出来事を共有してくれた。

「自分が白人だとはっきり認識したことはないわ。でも、忘れないで。私が 10 代後半の頃、ブラック・パワー運動が盛んで、買い物に行くときはいつも、『ホンキー』、『ホワイティ』とか白人の蔑称で呼びかけられていたわ。で、私は『だまんなさい!』と怒鳴りつけていたけどね。街に行くといつも『ホンキー』。そのときがまさに私は違う生き物なんだと気づいた瞬間ね。」

It never hit me.... But don't forget, I growing up, in my teens, late teens, I went through Black Power, so anytime we used to go shopping and thing they would... "Honkies....whities..." And I used to bawl, "Shut up!" you know...when you went in town to shop and all that it was "honky". That's really when I realised...that I was different.

植民地時代に、例えば砂糖プランテーションで働くアフリカ奴隷がヨーロッパ系白人の領主に向かい、白人を揶揄する蔑称で面と向かって呼ぶことは命を落とすほどの折檻を意味する。しかしマノンが蔑称で呼ばれたのは、時は奴隷解放後、植民地時代終焉後の非ヨーロッパ系市民の社会的地位の向上と、富と機会の不平等な分配を呼びかけるブラック・パワー運動の最中であった。これが 10 代後半の若い白人女性ではなく、60 代の白人男性であったならば、同じように蔑称で呼ばれていなかったかもしれない。このことから、60 年～70 年代のトリニダードでは、「ヨーロッパ系白人＝非情なプランテーション領主」というイメージが、少なくとも 10 代の白人女性に対しては薄れていたことが解る。

「自分が白人だとはっきり認識したことはない」というマノンの語りは興味深い。しかし「違う生き物」だとは気づいたのである。何が「違う」と気づいたのか。「白人であること」でなければ、道ばたで大声を張り上げ他人を蔑称で揶揄する人間とは違うということか。白人だとはっきり認識していなくても、社会の大多数とは違うとは気づいたということか。生まれた時からトリニダード社会には、またマノンの生家にも、様々な家事を手伝ういわゆる「ヘルパー」が複数人働いていた

と想像する。トリニダードの場合、そのような仕事に就くのは非ヨーロッパ系の人々、60～70 年代だとアフリカ系の人たちが多かったはずである。そのことをマノンに聞いてみると以下のように語った。

「私の祖父の頃からここカスケイド地区に住んでいるんだけど… 私が子どもの頃は、ここ一帯はカカオとコーヒーのプランテーションだったのよ。モン・リポ・ロードを駆け上がると、カカオとコーヒーだらけだった。確かに、プランテーションの世話人がいたわ。私たち子どもたちはみんな彼のことを怖がっていたね。『悪人エリック』よ。エリックという名前だね、私たちは『悪人エリック』って呼んでいたわ。(笑)」

...Granddad... the land is big so they live here...--Growing up as children, it was full everywhere. When we ran up Mon Repos Road, they were all there...Oh that is another caretaker who was up there...We were scared of him. Bad Man Eric. His name was Eric and we used to call him Bad Man Eric (LAUGHTER).

幼少の頃に身近にいた非ヨーロッパ系はエリックという名のアフリカ系男性だったという。しかし怖がって「悪人エリック」という呼び名で呼んでいたという。ここでなぜエリックが怖かったのかを聞いてみた。すると言いよどむことなく、「ただ単に黒くて、黒人ばかりが住む『悪人エリア』に住んでいたからじゃないかしら。」[Maybe it's just that he was black and from "badman area".]と発言した。エリックの犯罪歴については何の情報もないが、エリックがアフリカ系であることと、アフリカ系が多く住む地域出身であることから、疑問も持たずに怖がったということになる。

また子どもが大人に対し、面と向かって「悪人」と呼んで失礼ではないと考えられたのは、それぞれがプランテーション所有層で雇用主の家族であるヨーロッパ系白人の子どもと、絶対服従の立場である使用人としてのアフリカ系の大人という立場だからである。ヨーロッパ系白人の子どもがプランテーションの世話人のエリックを、アフリカ系でアフリカ系が多く住む地域出身というだけで「悪人」呼ばわりすることが許される状況とは逆の事例、つまりアフリカ系であることにより何か

が特別に許されるような事例は、まず数多くは起こらなかっただろう。ここでもヨーロッパ系白人のゆがんだ特権を垣間見ることができる。

ヨーロッパ系白人であることを認識してこなかったマノンには、子どもの頃よりヨーロッパ系白人であることは特別なことでないと感じる環境で育ってきたといえる。それはヨーロッパ系白人を中心に、それ以外の非ヨーロッパ系市民はあたかも存在しないような環境であったかもしれない。それは非ヨーロッパ系市民の姿が物理的に見えない環境かもしれないし、非ヨーロッパ系市民を、実際には存在していても、存在しないものとして扱っていた環境かもしれない。どのような環境だったにせよ、マノンは自身がヨーロッパ系白人であるという事実を、ヨーロッパ系白人の特権についての気づきを通して、60歳を過ぎて初めて知るようになった。マノンはその際のエピソードを、とんでもないことが起こっていたと怒りと悲しみを表現しながら、以下のように共有した。

「こないだ知ったばかりの恐ろしいことなんだけどね。家族ぐるみでキャシー・△△△△と親しくしているんだけど…キャシーは△△△△家に嫁いで白くなったんだけど、それはさておき、私たちフランス系はカントリー・クラブという社交クラブのメンバーなの。そこがすべてのヨーロッパ系白人や中国系が集っていたところなのよ。私はキャシーと一緒に、ビーチやら、色々なところに行って遊んでいたの。で、カントリー・クラブはいつでも何かしら大きなイベントをしていたの。そういうことを話していたら、キャシーが『私はカントリー・クラブに行ったことがないのよ。私たちが一緒にカントリー・クラブに入場することは許されなかったのよ』って言ったの。私は65歳になるんだけど、キャシーは70歳ね。私はキャシーを見つめちゃったわ。で、『何を言ってるの？あなた、あなたは私と一緒にカントリー・クラブにいなかったってどういうの？』って聞いたの。そうしたらね、彼らの出入りは禁止されていたんだって！『ダメだったのよ、マノン。気づいていなかったのね。私たちはカントリー・クラブに出入りしたことがないし、カントリー・クラブのドアを開けたこともないし…カントリー・クラブはあなたたちだけのものだったのよ。』って!! もう、私は、ただただショックで!! 『信じられないわ』って言っちゃったわ。私とキャシーはマラカス・ビーチにも行ったし、離れ島にも遊びに行ったし。それだから私は全然気づいてなかったのよ、カントリー・クラブにキャシーが入れなかったなんて。で、『なんてことよ』って言ったわ。なんて酷いんでしょう。しかもそれはそんなに昔のことじゃないのよ!」

You know what horrific thing I only found out the other day? ...we're very friendly with Kathy △△△△, ...Kathy married white into △△△△ and anyway... going back to French Creole... We all belonged to the Club, the Country Club. That's where all the white people went, Chinese etc. you know... Anyway, we are liming, whether the beach, whether here or there, and any time the club, the club had huge fetes,... and Kathy said "I didn't go there, we weren't allowed to go with each other." I am going to be sixty-five years old, Kathy is seventy, I looked at Kathy and said, "Kathy, you all was not in the club?" They weren't allowed!! "No Mannon, we never walked through the club, the doors of the club, it was only your people." I was just so shocked!!!... I said, "Kathy, I can't believe you." We limed in Maracas Bay, we down the islands so so so... I never noticed...And I said "Oh my God." How terrible is that. And that is not that long ago!

このキャシーの発言からは、実質的にはヨーロッパ系白人しか入会できない、いわゆる「白人専用」の会員制社交クラブであるカントリー・クラブについて、マノンが幼少の頃、つまり1960年代には中国系も入会が許可されていた状況が読み取れる。肌の色はヨーロッパ系白人と変わらない、シリア・レバノン系の友人キャシーは、マノンが子どもの頃より足しげく通っていた社交の場であるカントリー・クラブに、入会どころか入場もできなかったということを近頃知ったという。しかもマノンのカントリー・クラブでの楽しい思い出の中にはキャシーも一緒にいて、一緒に楽しんでいたと思ひ込んでいたのである。

このエピソードでは、ヨーロッパ系白人しか経験できないこと、ヨーロッパ系白人は体験しなくてよいことなど、いわゆるヨーロッパ系白人の特権が描かれている。マノンは、ありとあらゆる社会特権について65歳になるまで気づかなかったわけだが、これは社会特権を受けることが当たり前前の時代に生きていて、社会特権を要求しても受け入れられる環境が備わっていたからである。

カントリー・クラブについては、マノンの生家がメンバーであったし、婚家もメンバーであった。自身がヨーロッパ系白人であると認識したことが

ないと発言していたマノンには、カントリー・クラブは「すべてのヨーロッパ系白人」が通う場所であるとも発言している。つまり、カントリー・クラブに通っていた自身もヨーロッパ系白人であるはずなので、マノンは自分がヨーロッパ系白人であると認識していたはずである。しかし家族も近所も親戚もすべてがヨーロッパ系白人で、数人の使用人しか非ヨーロッパ系市民と接する機会がない環境で育ってきたのであれば、カントリー・クラブのヨーロッパ系白人しかいない環境が特別でなくなり、他者を認識する機会が失われるため、社会特権を持つヨーロッパ系白人であるとの強い認識は持つことはなかったのであろう。

さらにマノンの語りには興味深い言い回しが含まれていた。シリア・レバノン系で肌の色はヨーロッパ系のように白いキャシーが、△△△△というヨーロッパ系白人家族出身者と結婚したことで、ヨーロッパ系白人となったことを [Kathy married white into △△△△] と表現していた。ここでは実際にはヨーロッパ系白人でない女性が、ヨーロッパ系白人男性と結婚することで、ヨーロッパ系白人になることができる事例をみた。またアメリカ合衆国やフランスなどの多元文化国家における異人種間結婚による社会階層移動に関する先行研究<sup>[61]</sup>も同様に、夫が属する社会階層や「人種」コミュニティに妻が移動する事例や、妻の属性からは距離が置かれる事例を報告している。さらにジョーンズの先行研究<sup>[62]</sup>は植民地時代のバルバドスにおける異人種間結婚が女性に与える影響を指摘し、執筆者の先行研究<sup>[63]</sup>ではトリニダードのフランス系白人女性が非ヨーロッパ系の男性と結婚すると、家族から実質的に勘当され、ヨーロッパ系白人としての特権も社会的に剥奪されることを明らかにした。したがって、ヨーロッパ系白人であるかどうか、またその特権も含めた白人性は、ジェンダーによっても差異が生まれることは明らかである。

### (3) クリステル 30代前半

執筆者が今まで聞き取り調査を行ったヨーロッパ系白人の中で、ヨーロッパ系白人としての最強の認識を持ち、それを遠慮なく自由に表現してくれたのは、金髪碧眼のフランス系の若い女性クリステルである。彼女は編集者という職業柄、自身も聞き取り取材を行うことが多く、聞き取りする

側の経験が豊富で、執筆者が聞き取りたいことを的確に捉え、わかりやすく説明するように心がけてくれた。こんな機微な内容まで聞き取ってしまい大丈夫なのだろうか心配してしまうような、当事者でしか紹介できない貴重な経験を語ってくれた。

いつからヨーロッパ系白人であることを認識したかとの問いに、クリステルは、「よくわからないわ。でもいつも鋭く認識していたと感じていたわ。」 [I don't know, I always felt very acutely aware of it]. と回答した。続けて、通っていた学校の状況を紹介してくれた。

「私が通っていた学校は、英国国教会系の学校でした。私の他には、アジア系の3姉妹ともう一人のヨーロッパ系白人。それだけ。他はアフリカ系とインド系。だから私たちは非常に…私たちは極端に自意識過剰に感じていたわ。だから友人を作るのには大変だった。…そしてなんとか友人ができて、常に他の人とは違うんだということを大いに感じていました。」

I went to school ...it was Anglican. But there were...Asian triplets and one other white kid and that was it. And we were very... we felt extremely self-conscious, it was kind of hard to make friends... you kind of did, but you felt very aware of being different.

クリステルが通っていた学校は、現地の良家の子どもが通う私立校として、現在も外交官や国連機関に勤める外国人のトリニダード在住者にも人気の学校である。ヨーロッパ系白人であることを常に「鋭く」[acutely] 認識せざるを得ない学校環境について説明を促したところ、以下の語りを展開した。

「同級生はいつも、なんというか…、同級生から髪の毛を切られそうになったりしました。からかい半分に『人形みたいな髪の毛してる』とか言って… 他の同級生とは違うということを、強く認識せざるを得なかった… それとか『ほらあんなの目っておかしい』とかね。目の色が薄いからって…」

And they always like...they would make you cut your hair...“You have doll



hair...”...You were very aware of being different...And “look at your eyes” because you had very fair eyes.

毛髪の形状が大部分の生徒のものと違うからといって、からかいの対象にして、またふざけ半分で髪の毛を切ろうとするのは、いじめに他ならない。カリブ海地域の人種関係や現代社会に関する研究によると、ヨーロッパ系白人は植民地時代から変わらない特権を享受しながら、快適な暮らしを21世紀現在も送っているとの印象を受ける<sup>[64]</sup>。ヨーロッパ系白人が、非ヨーロッパ系市民との身体的特徴の差異を理由としてからかわれ、いじめられる事例の報告は管見の限り存在しない。クリステルがこのいじめを両親に報告し、両親が学校に報告し、教員がクリステルの同級生に注意しようものなら、今度は特別扱いをされているといじめられたという。生まれながらの変えられない身体的特徴を攻撃の対象とするのは陰険としかいいようがない。

ヨーロッパ系白人がその身体的特徴を理由に、非ヨーロッパ系市民からいじめの対象にされる状況は、植民地時代から独立後1970～80年代頃まであり得なかったことである。実際に、年配のヨーロッパ系白人からは、非ヨーロッパ系にからかわれたりいじめられたりといった経験は聞かない。この逆差別の嫌がらせが発生し始めた1970～80年代のトリニダード社会は、アメリカ合衆国の公民権運動から影響を受けたブラック・パワー運動が盛んであった。このヨーロッパ系白人の富と機会の独占を糾弾し、不平等是正を求めたブラック・パワー運動が非ヨーロッパ系市民とヨーロッパ系白人の政治的力関係の変化の起点であることは間違いない。

非ヨーロッパ系市民は、奴隷搾取などの非人道的悪事の当事者であるとする罪の意識を現代のヨーロッパ系白人に抱かせることで、現代の非ヨーロッパ系市民の一部が機会や富に恵まれない原因をヨーロッパ系白人に押しつけることを正当化した。それは非論理的で感情的であり、政治的妥当性が欠如しているのだが、それを当然とする風潮は現代社会に存在する。

つまりクリステルは今まで一度も、奴隷を所有し搾取した経験もないのだが、ヨーロッパ系白人

であるというだけで、父祖の非人道的な行動に対する罪と恥の感情を強制的に負担させられるのである。同様に、一度も奴隷になった経験がない21世紀を生きるアフリカ系も、奴隷として苦しみを与えられてきたとして、21世紀の現代社会に生きるヨーロッパ系白人に現代社会で富や機会に恵まれない状況の責任を転嫁する。奴隷制度が廃止され、植民地支配からの脱却を遂げても、今なお奴隷と所有主、つまり非支配者と支配者の関係は、精神的な呪縛として人々の中に存在している。

ここでクリステルにヨーロッパ系白人であることが有益に働いた事例について聞いてみた。すると「これはとても嫌な人間みたいに聞こえるから、名前は絶対に出さないで欲しい。」[it sounds so awful, don't use my name in that.]と前置きをして、次のように語った。

「私が思うのは、たとえば仕事の採用面接かなんかに行ったら、採用されるという自信はあるわ。なぜなら私は『かわいい白人の女の子』だから。でも頭の空っぽな馬鹿に見えないように人より一生懸命働くけど。それはこの金髪のせいでもあるんだけど。つまり、なんとというか、白人で金髪の女性はステレオタイプ化されて見られるの。」

...I do think that if I went to a job interview or something I would feel more confident about getting it because I am a little white girl. But I will work hard to not look ditsy or air headed... because I think the blond thing too... you get like... stereotyped.

ヨーロッパ系白人であることが有利に働く事例を実直に紹介したクリステルであるが、すぐにヨーロッパ系白人の身体的特徴が不利に働く事例の言及を始めた。金髪のクリステルは、金髪のヨーロッパ系白人女性は「バカで」[ditsy]、「頭の空っぽ」[air headed]な存在であるとステレオタイプ化されると不満を表明した。そしてヨーロッパ系白人であることが不利に働いた体験を紹介してくれた。

「でも、また他の場面でもヨーロッパ系白人であることが不利に働くことはあると思うの。身長が

高く、ものすごく色が白くて、完全な金髪の友人がいるのだけど、私たちは小さな事業をしているの。編集や校正の仕事よ。あるとき私たちの会社のウェブサイトを立てようとして、少し考えたのよ。私たちの写真も載せる？って。でも私たちが下した決断はノーよ。私たちはきっと非難されると思ったの。とても多くの人々が白人女性に対してイラつきや不満を抱いているものなの。だから時に人は、なんというか、敵対してくるのよ。」

But then in other situations, I think it would work against you,... so a friend of mine, also tall, very fair skinned, very blond, we had a little business together, we were doing editing and proof reading. And when we were doing up the website for it, we thought... should we put pictures? And we were like no because you would be judged... a lot of people have chips on their shoulders about white girls and you know... so they might kind of... get hostile....

クリステルの経験としてヨーロッパ系白人女性に対し敵対する非ヨーロッパ系市民は多いという。また事業のウェブサイトを立てる際、専門性が重要視される事業案内ウェブサイトには、事業主として金髪碧眼のヨーロッパ系白人の写真を載せることは、上記のような敵対心を煽り、金髪の白人女性のステレオタイプ化したイメージによって判断されるため、決して有益ではないと判断を下した経験を共有してくれた。これほどまでヨーロッパ系白人であることを認識しているクリステルが、ヨーロッパ系白人であることが不利に働いた事例を列挙するとは想像していなかった。

そして、先に挙げた例以前にも、ヨーロッパ系白人であることが不利に働いた例があったことをさらに紹介してくれた。このエピソードが紹介された際、多くの言いよどみや言い直しがあつた。

以下〇〇〇〇はトリニダードの省庁である。▽▽はトリニダード省庁内のある部署である。クリステルは政府から奨学金を支給されて英国で高等教育を受けたので、トリニダードに帰国してから約3年はトリニダードの省庁で働かなくてはならなかった。

「〇〇〇〇での仕事のことなんだけど、私の上司

は… 私はその職場での唯一のヨーロッパ系白人だったの。奴隷解放記念日に… なんというか、私はいつもその日はいい気分でないのだけど… 奴隷解放記念日に私の職場では、同僚がジョークとして、なんというか、毎年、奴隷解放記念日の祝賀記念イベントを開催するために、お金を調達する必要があるって… 同僚がお金を調達するために私を柱にくくりつけて鞭打ちしたい人に1ドル払ってもらえばいいって言ったの(笑)。これは〇〇〇〇での公式の会議での出来事なのよ。でも同僚たちは私が… 私は笑い飛ばしたけど、『ほんっとにもう！いい加減にしてよ！』と思ったわ… して▽▽部署の部長が私と会ったとき、彼女は私がトカゲのおなかの色をしているって言ったの…」

This job here, at 〇〇〇〇, my boss...I was the only white person who worked there...on Emancipation Day, ok so you see I always felt very weird they were like.... On Emancipation Day, in 〇〇〇〇, they made a joke that, to raise money, because they had like, celebrations every year on this Emancipation, they said that to raise money they should tie me to a pole and people could pay a dollar to whip me. (LAUGHTER) This is in an official meeting at 〇〇〇〇 ... But they know I would... but I did laugh about it but I thought “Jeez” but don’t you know... the head of the ▽▽ department, when she met me, said I was the colour of a lizard’s stomach...

これは植民地時代のプランテーション領主がヨーロッパ系白人であったことから、ヨーロッパ系白人であるクリステルを領主に見立て、プランテーション領主から非ヨーロッパ系の人々が受けた仕打ちを、領主にやりかえそうというプロットに基づいたジョークである。ヨーロッパ系白人であるクリステルの心情をあまりに無視した、あまりにデリカシーのないジョークである。しかしその場にいたクリステルはここで笑い飛ばしておかないと、のちのちの職場での人間関係が面倒くさくなるとのことで、内心は怒りを乗り越えて悲しかったけれど、笑っておいたと言っていた。

さらにクリステルの上司は、クリステルに面と向かって「トカゲのおなかの色をしている」と言ったという。逆に、クリステルが非ヨーロッパ系である上司に「ゴキブリの背中の色をしている」

と言ったら人種差別であるとして大問題になる。職場の同僚も上司も、非ヨーロッパ系がヨーロッパ系白人の白人性について冗談を言っても許されるが、ヨーロッパ系白人が非ヨーロッパ系の人種や肌の色に関して冗談を言うことは人種差別であるとして許されないということを逆手にとってクリステルに嫌がらせをしたのである。

今までの執筆者の調査では、比較的若年層のヨーロッパ系白人が非ヨーロッパ系市民による嫌がらせを受ける経験を聞いてきた。2019年現在50歳以上のヨーロッパ系白人男女からは、白人であることを理由とする嫌がらせ経験を聞いたことがない。つまり1980年前後を境に、非ヨーロッパ系市民からヨーロッパ系白人に対する嫌がらせが発生し始めたのであり、それは前述のとおりブラック・パワー運動が盛んであった時期と重なる。また男性よりも女性の方が、嫌がらせの対象となりやすいようである。特に女性は、クリステルの経験のようにヨーロッパ系白人の過去を標的とした言葉による人種的嫌がらせを受けるだけでなく、非ヨーロッパ系男性からの執拗な言葉による性的嫌がらせの対象となっている。このような事例は、年齢を問わず多くのヨーロッパ系白人女性が経験している。

上記のような経験をしてきたクリステルは、ヨーロッパ系白人としての認識を非常に強く持っている。その認識は、ヨーロッパ系白人が享受できる社会的特権に基づくものでは決してなく、ヨーロッパ系白人であるからこそ受けてきた逆人種差別や様々な嫌がらせによって強化されていることがみえる。

## 5. おわりに

本稿は、カリブ海のトリニダード島において総人口に対して0.7%しか存在しないヨーロッパ系白人が、どのように白人としての認識を得たかについて探求した。その方法としては、2017年8月と2018年2月にトリニダードにおいて、オーラル・ヒストリーの理論で入手した、ヨーロッパ系白人の貴重な個人の経験の語りを質的データとして提示して考察を行った。

本稿で取り上げたトリニダードのヨーロッパ系白人に関する研究や、彼らの社会实践や実態につ

いての知見は非常に蓄積が少ない。そのため、オーラル・ヒストリーとして個人の経験を一つの「事実」として扱い、個人の主張や誇張、思い込みや故意の虚偽をも含んだ語りを、社会を構成する「事実」の一つとして扱った。そしてその「事実」を分析し、解釈を行い、考察することで、その個人が経験した「事実」や、事実を包括する社会の構造や、その社会での一般の人々の暮らしの営みについて理解を進めることができると考えた。

本稿で取り上げた聞き取り調査の参加者3人は、ヨーロッパ系白人としてトリニダードで生活を送る者だけであった。そしてその前提は、執筆者の先行研究で明らかにしたように、ヨーロッパ系白人としての純血性であった。それを踏まえ、本稿でトリニダードのヨーロッパ系白人について新たに確認した点は、以下のとおりである。

まず、自身のヨーロッパ系白人としての認識は、身体的特徴の違いに基づく、アフリカ系やインド系など他の社会構成員である他者の認識に促されるということである。またヨーロッパ系白人であるとの認識は植民地時代の歴史的事実「父祖がアフリカ系を非人道的に酷使した白人奴隷主」であるとアフリカ系やインド系など他社会構成員によって認識を強要させられることでも強まることをみた。

さらに本稿でみた、アフリカ系やインド系などの他社会構成員からのヨーロッパ系白人の身体的特徴を理由とするいじめや嫌がらせの数々や、逆人種差別行為は、ヨーロッパ系白人としての認識を強めた。ヨーロッパ系白人と社会の大多数である非ヨーロッパ系市民との「人種の違い」を標的にされ、それを理由に嫌がらせを受けると、否が応でも自身と非ヨーロッパ系市民との違いを強く認識することになる。そうしてその違いの認識こそが、非ヨーロッパ系市民と自分たちは異なる存在だとして、ヨーロッパ系白人としての自己認識を強く持たせることに繋がっていると言える。

本稿で取り上げた3人の中には、白人であるとする明確な認識は持たなかったことがないと言主張する者も存在したが、他社会構成員とは「違う生き物」であるとは認識していた。彼女の語りからは、少なくとも身体的特徴や社会階層に関する「違い」には気づいていることが伺えた。植民地時代にヨ



ヨーロッパ系白人に囲まれて生活していたことから、他者を認識する機会が失われたため、結果として自身が社会特権を持つヨーロッパ系白人であると気づくことなく、認識する機会が失われたと考えられる。同時に、様々な社会特権を当然のこととして享受してきたにも関わらず、その社会特権はヨーロッパ系白人にしか付与されていないものだと気づいていなかったことも明記する。

本稿は3つの事例を分析したに過ぎない。しかし特殊な事例を取り上げた本稿は、その事例を一つ一つ深く分析することで、その背景にあるものの言語化、そして可視化に成功した。つまりヨーロッパ系白人は、他者の存在から、また他者との関わりを元に、ヨーロッパ系白人であるという認識を強めるということである。3つの事例ではトリニダードのヨーロッパ系白人の全体像が定義されたわけでもなく、明確な回答が得られたわけでもない。今後も同様のテーマについて多角的に分析を続けることで、より具体的な姿を論じることができると考える。

### 謝辞

My deepest gratitude goes to the European-white people of Trinidad. Without your inspiration and valuable knowledge, this study would not be completed. I would like to express special appreciation to Ms. J. Innis, Ms. A. Israel, Ms. K. Black, Ms. A. Reason, Mr. W. Cezair, and Dr. Bahadursingh.

安全かつ効率的に現地調査を行うことができたのは、Aegis Inc. Co. Ltd.と Island Buddy Ltd.の皆様のお陰です。いつも温かく迎えて下さるトリニダードの在留邦人のみなさま、心身ともに支えて下さってありがとうございました。

### 付記

本研究は、SPS 科研費 JP17K02034 および大妻女子大学人間生活文化研究所戦略的個人研究費 (S2915) の助成を受けたものです。

### 引用文献

[1] Ito, Michiru 伊藤みちる  
---- “French Creoles in Trinidad: Constructing and

Reproducing Whiteness” Masters Dissertation. University of Warwick, UK. 2006.

---- “Constructing and Reproducing Whiteness: An Oral History of French Creoles in Trinidad” *International Journal of Human Culture Studies*. 2016, 26: pp.613-645.

---- 「旧英領カリブ海地域における白人性の多様性ーバルバドスとトリニダードの比較ー」『人間生活文化研究』2018, 28: pp. 752-792.

---- “Questioning Whiteness: ‘Who is white?’” *International Journal of Human Culture Studies*. 2019, 29, pp.660-695.

[2] Quinn, Kate. *Black Power in the Caribbean*. University Press of Florida, 2014.

[3] Thompson, Alvin O. *The Haunting Past: Politics, Economics and Race in Caribbean Life*: Routledge, 2015.

[4] Central Statistical Office. The Republic of Trinidad and Tobago. “2011 Population and Housing Census”.

[5] Jones, Cecily. “Constructing the boundaries of gender, race and sexuality in Barbadian plantation society”. *Women’s History Review*. 2003, 12(2): pp.195-232.

[6] Camejo, Acton. “Racial Discrimination in Employment in the Private Sector in Trinidad and Tobago: A Study of the Business Elite and the Social Structure”. Christine Barrow and Rhoda Reddock (eds.) *Caribbean Sociology: Introductory Readings*. Kingston, Jamaica: Ian Randle, 2001: pp.753-771.

[7] Wilson, Stacey-Ann. *Politics of Identity in Small Plural Societies: Guyana, the Fiji Islands, and Trinidad and Tobago*. Palgrave Macmillan, 2012.

Brian Meeks and Folke Lindahl (eds.) *New Caribbean Thought: A Reader*. University Press of the West Indies, 2001.

Figueira, Daurius. *The Politics of Racist Hegemony in Trinidad and Tobago*. iUniverse, 2010.

Kiely, Ray. *The Politics of Labour and Development in Trinidad*. The Press University of the West Indies, 1996.

[8] De Verteuil, Anthony. *Trinidad’s French Legacy*. Trinidad: The Litho Press, 2010.

[9] Johnson, Kim. *Descendants of Dragon: The Chinese in Trinidad 1806-2006*. Kingston: Ian Randle, 2006.

[10] カリブ海地域のアフリカ系市民に焦点を当てた研究の例は以下のとおり

- Gilroy, Paul. *The Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness*. London: Verso, 1993.
- Klein, Herbert and Vinson, Ben. *African Slavery in Latin America and the Caribbean*. New York: Oxford University Press, 2007.
- McGowan, W. at el. (eds.) *Themes in African-Guyanese History*. London: Hansib, 2009.
- Thornton, Michael C., et al. "African American and Black Caribbean feelings of closeness to Africans". *Identities*. 2017, 24(4): pp. 493-512.
- [11] カリブ海地域のインド系市民に焦点を当てた研究の例は以下のとおり
- Dabydeen, D. and Samaroo, B. (eds.) *India in the Caribbean*. London: Hansib, 2006.
- La Guerre, John. *Calcutta to Caroni: The East Indians of Trinidad*. University of the West Indies Press, 1985.
- Seesaran, Rosabella. *From Caste to Class: The social mobility of the Indo-Trinidadian Community 1870-1917*. Trinidad and Tobago: Rosaac Publishing, 2002.
- Roopnarine, Lomarsh. *The Indian Caribbean: Migration and Identity in the Diaspora*. Jackson: University Press of Mississippi, 2018.
- [12] カリブ海地域の中国系市民に焦点を当てた研究の例は以下のとおり
- Lai, L. Walton. *The Chinese in the West Indies 1806-1995: A Documentary History*. Kingston: University of the West Indies Press, 1998.
- Rhoda E. Reddock (ed.) *Ethnic Minorities in Caribbean Society*. Trinidad and Tobago: Zenith, 1996.
- Shibata, Yoshiko. "Revisiting Chinese Hybridity: Negotiating Categories and Re-constructing Ethnicity in Contemporary Jamaica- a Preliminary Report". *Caribbean Quarterly*. 2016, 51(1): pp. 53-57.
- "Searching for a Niche, Creolizing Religious Tradition: Negotiation and Reconstruction of Ethnicity among Chinese in Jamaica". Kumar, Pratap. *Religious Pluralism in the Diaspora*. Brill, 2006: pp. 51-72.
- Ma, Laurence and Cartier, Carolyn. (eds.) *The Chinese Diaspora: Space, Place, Mobility, and Identity*. Maryland: Rowman and Littlefield Publication, 2003.
- 前山隆「クリオール化, ガイアナ化, 中国系ガイアナ文化」『アジア系ラテンアメリカ人の民族性と国民統合 - 民族集団間の協調と相克に関する研究』静岡大学人文学部文化人類学教室, 1993: pp.79-93.
- [13] 前掲[8]参照.
- [14] Smith, Raymond. "Social Stratification, Cultural Pluralism and Integration in West Indian Societies". Barrow, C. and Reddock, R. (eds.) *Caribbean Sociology: Introductory Readings*. Kingston: Ian Randle. 2001: pp.87-107.
- [15] Vogt, Manuel. "Ethnic stratification and the equilibrium of inequality: ethnic conflict in postcolonial states". *International organization*. 2018, 72(1): pp. 105-137.
- Ray, Subhasish. "Beyond Divide and Rule: Explaining the Link between British Colonialism and Ethnic Violence". *Nationalism and Ethnic Politics*. 2018, 24(4): pp. 367-388.
- [16] Gomez, Edmund and Saravanamuttu, Johan (eds.) *The new economic policy in Malaysia: affirmative action, ethnic inequalities and social justice*. NUS Press, Singapore. 2013.
- David, Maya Khehlani, and Subramaniam Govindasamy. "The construction of national identity and globalization in multilingual Malaysia". Amy Tsui, and Tollefson, James. (eds.) *Language policy, culture, and identity in Asian contexts*. Routledge. 2017: pp. 55-72.
- [17] Central Statistical Office, Trinidad and Tobago. "Trinidad and Tobago 2011 Population and Housing Census: Demographic Report". 2011.
- [18] Central Statistical Office, Trinidad and Tobago. "Trinidad & Tobago 2000 Housing and Population Census". <https://cso.gov.tt/census/2000-census-data/> (accessed 2019-11-8)
- [19] Organization of American States. Inter-American Commission of Human Rights. "The Situation of the People of African Descent in the Americas". 2011. [https://www.oas.org/en/iachr/afro-descendants/docs/pdf/afros\\_2011\\_eng.pdf](https://www.oas.org/en/iachr/afro-descendants/docs/pdf/afros_2011_eng.pdf), (2019-1-13).
- [20] ファノン, フランツ. 『黒い皮膚・白い仮面』みすず書房, 1998年.
- [21] Mullings, Beverley. "Commentary: Post-Colonial Encounters of the Methodological Kind". *Southeastern Geographer*. 2005, 45(2): pp. 274-280.
- Kingsbury, Paul. "Riddims of the Street, Beach, and Bureaucracy: Situating Geographical Research in Jamaica". *Southeastern Geographer*. 2005, 45: pp. 251-273.
- [22] Tate, Shirley. *Skin bleaching in black Atlantic*

- zones: *Shade shifters*. London: Palgrave MacMillan, 2015.
- [23] Charles, Christopher. "Skin Bleaching, Self-Hate, and Black Identity in Jamaica". *Journal of Black Studies*. 2003, 33(6): pp. 711-728.
- Hope, Donna. "From Browning to Cake Soap: Popular Debates on Skin Bleaching in the Jamaican Dancehall". *Journal of Pan African Studies*. 2011, 4(4): pp. 165-195.
- [24] Levine, Susan, et al. "Skin Lightening/Bleaching". *The Wiley Blackwell Encyclopedia of Gender and Sexuality Studies*. 2016: pp. 1-3.
- Peltzer, Karl, et al. "The globalization of whitening: prevalence of skin lighteners (or bleachers) use and its social correlates among university students in 26 countries". *International journal of dermatology*. 2016, 55(2): pp. 165-172.
- [25] Dlova, N. C., et al. "Skin lightening practices: an epidemiological study of South African women of African and Indian ancestries". *British Journal of Dermatology*. 2015, 173: pp. 2-9.
- Hunter, Margaret. "Buying racial capital: Skin-bleaching and cosmetic surgery in a globalized world". *The Journal of Pan African Studies*. 2011, 4(4): pp. 142-164.
- Glenn, Evelyn Nakano. "Yearning for lightness: Transnational circuits in the marketing and consumption of skin lighteners". *Gender & society*. 2008, 22(3): pp. 281-302.
- [26] Brennan, Fernne. *Race Rights Reparations: Institutional Racism and The Law*. Routledge, 2017.
- [27] 前掲[20] ファノン, 1998年. 参照.
- [28] Frankenberg, Ruth. *White Women, Race Matters: The Social Construction of Whiteness*. University of Minnesota Press, 1993.
- Dyer, Richard. *Whiteness*. Routledge, 1997.
- Lopez, Alfred. *Postcolonial Whiteness: A Critical Reader On Race And Empire*. State University of New York Press, 2005.
- Ashikari, Mikiko. "Cultivating Japanese Whiteness: The 'Whitening' Cosmetics Boom and the Japanese Identity". *Journal of Material Culture*. 2005, 10(1): pp. 73-91.
- Fujimoto, Etsuko. "Japanese-ness, Whiteness and the 'Other' in Japanese Internationalization". Collier, Mary. (ed.). *Transforming Communication About Culture*, Sage, 2001: pp. 1-24.
- Steyn, Melissa. *Whiteness Just Isn't What It Used to Be: White Identity in a Changing South Africa*. State University of New York Press, 2001.
- Punt, Jeremy. "(Southern) African Postcolonial Biblical Interpretation: A White African Perspective". *Journal of Early Christian History*. 2017, 7(3): pp. 4-24.
- Casey, Zachary. "Strict fathers, competing culture(s), and racialized poverty: white South African teachers' conceptions of themselves as racialized actors". *Race Ethnicity and Education*. 2016, 19(6): pp. 1262-1274.
- [29] Frankenburg, Ruth. *White women, race matters: The social construction of whiteness*. Routledge, 1993.
- [30] 前掲[5] Jones, 2003. 参照.
- [31] J.D. ヴァンス, 『ヒルビリー・エレジー アメリカの繁栄から取り残された白人たち』(訳: 関根光宏, 山田文) 光文社, 2017.
- [32] 金成隆一  
---- 『ルポ トランプ王国—もう一つのアメリカを行く』岩波書店, 2017年.  
---- 『記者, ラストベルトに住む—トランプ王国, 冷めぬ熱狂』朝日新聞出版, 2018年.
- [33] 南修平 「アメリカ労働史から捉えた『白人労働者』—『トランプ現象』を読み解くカギとして」大原社会問題研究所雑誌 2019, 725: pp. 38-52.
- [34] Brereton, Bridget. *Race Relations in Colonial Trinidad 1870-1900*. London: Cambridge University Press, 2002.
- [35] De Verteuil, Anthony.  
---- *Trinidad's French Legacy*. Trinidad: The Litho Press, 2010.  
---- *Leon de Gannes: Trinidad's Reconteur*. The Litho Press, 2008.  
---- *Sylvester Devenish and the Irish in 19<sup>th</sup> century Trinidad*. Paria Publishing, 2008.
- なお, デ・ヴェトゥイユがフランス語の音に近いが, トリニダードでは De Verteuil は英語読みされるようになり, デ・ヴァタイルに近い音となっている。
- [36] Jones, Cecily. *Engendering whiteness: White women and colonialism in Barbados and North Carolina, 1627-1865*. Manchester University Press, 2014.
- [37] Beckles, Hilary.  
---- *Centering woman: gender discourses in Caribbean slave society*. Kingston: Randle, 1999.  
---- "Sex and Gender in the Historiography of



- Caribbean Slavery”. V. Shepherd et al. (eds.), *Engendering History: Caribbean Women in Historical Perspective*. Palgrave Macmillan, 1995: pp. 125-140.
- [38] 2000 United States Statistic Bureau.  
<https://www.census.gov/prod/c2kprof00-pr>  
(accessed 2019-11-4)
- [39] 2018 United States Statistic Bureau.  
<https://www.census.gov/quickfacts/PR> (accessed 2019-11-4).
- [40] Landale, Nancy S. and Oropesa, R.S. “White, Black, or Puerto Rican? Racial Self-Identification among Mainland and Island Puerto Ricans”. *Social Forces*. 2002, 81 (1): pp. 231-254.
- [41] Loveman, Mara and Muniz, O. Jeronimo. “How Puerto Rico Became White: Boundary Dynamics and International Racial Reclassification”. *American Sociological Review*. 2007, 72(6): pp.915-939.
- Vargas-Ramos, Carlos. “Black, Trigueño, White...? Shifting Racial Identification among Puerto Ricans”. *Du Bois Review*. 2005, 2(2): pp. 267-685.
- Duany, Jorge. *The Puerto Rican Nation on the Move: Identities on the Island and in the United States*. London: University of North Carolina Press, 2002.
- [42] Goode, Joshua. *Impurity of Blood: Defining Race in Spain, 1870–1930*. Louisiana State University Press, 2009.
- [43] “Martinique Population 2019”. World Population Review.  
<http://worldpopulationreview.com/countries/martinique-population/> (accessed 2019-11-3)
- [44] Sheringham, Olivia. “Markers of identity in Martinique: being French, black, Creole”. *Journal of Ethnic and Racial Studies*. 2016, 39 (2): pp. 243-262.
- Chrisafis, Angelique. “France faces revolt over poverty on its Caribbean islands”. *The Guardian*. 12 February 2009.  
<https://www.theguardian.com/world/2009/feb/12/france-revolts-guadeloupe-martinique> (accessed 2019-11-4).
- [45] Haines, David. *Immigration Structures and Immigrant Lives: An Introduction to the US Experience*. Rowman & Littlefield, 2017.
- [46] Dragojlovic, Ana. “Haunted by ‘miscegenation’: Gender, the white Australia policy and the construction of Indisch family narratives”. *Journal of Intercultural Studies*. 2015, 36(1): pp. 54-70.
- Fozdar, Farida, Brian Spittles, and Lisa K. Hartley. “Australia Day, flags on cars and Australian nationalism”. *Journal of Sociology*. 2015, 51(2): pp. 317-336.
- [47] Goldberg, David Theo. *Racial subjects: Writing on race in America*. Routledge, 2016.
- Alba, Richard. “The likely persistence of a white majority”. *The American Prospect*. 2016, 27(1): pp. 67-71.
- [48] Shirley, Tate and Law, Ian. *Caribbean racisms: Connections and complexities in the racialization of the Caribbean region*. Palgrave MacMillan, 2015.
- [49] Ellis, R. Evan. “The Collapse of Venezuela and Its Impact on the Region”. *Military Review*. 2017, July-August: pp. 22-33.
- Padrón, Elena. “Whiteness in Latina Immigrants: A Venezuelan Perspective”. *Women & Therapy*. 2015, 38(3-4): pp. 194-206.
- [50] Khan, Aisha. “What is a Spanish? Ambiguity and ‘mixed’ ethnicity in Trinidad”. Yelvinton, K. (ed.) *Trinidad Ethnicity*. The University of Tennessee Press. 1993: pp. 180-207.
- [51] 江頭説子「社会学とオーラル・ヒストリー：ライフ・ヒストリーとオーラル・ヒストリーの関係を中心に」『大原社会問題研究所雑誌』2007年 585 巻: pp. 11-32, p. 27.
- [52] 中村政則「オーラル・ヒストリーの可能性—満州移民体験を中心に」『歴史と民俗』2006年 22: pp. 31-84.
- 中村政則「オーラル・ヒストリーの可能性 (2)」『歴史と民俗』2007年 23: pp.81-120.
- 桜井厚「個人史の語りと歴史との接点—オーラル資料の構成と解釈」『歴史評論』歴史科学協議会編 777, 2015, 1: pp. 60-72.
- [53] 桜井厚『ライフストーリー論』弘文堂, 2016年.
- [54] Mintz, W. Sidney. *Worker in the Cane: A Puerto Rican Life History*. New York: Norton & Company, 1974.
- [55] 前掲[53] 桜井 2016年, p. 12.
- [56] 2018年12月, トリニダードのヨーロッパ系白人女性がアフリカ系とインド系の人々を蔑称で呼んでいる映像が SNS にリークされた. その映像を見た非ヨーロッパ系市民からのコメントは非常に興味深い.  
<https://www.youtube.com/watch?v=fJeP-GWupVk>
- Walker, James. “But You Not Even White! Prejudice and Light-skinned West Indians”. September 24, 2012.

- [http://www.outlish.com/but-you-not-even-white-pr-  
ejudice-and-light-skinned-west-indians/](http://www.outlish.com/but-you-not-even-white-pr-<br/>ejudice-and-light-skinned-west-indians/) (accessed  
2018-1-13)
- [57] Lamy, Rodolphe. “Martinique man convicted of  
making racist remarks”. December 15, 2010.  
Associated Press.  
[http://archive.boston.com/news/world/latinamerica/  
articles/2010/12/15/martinique\\_man\\_convicted\\_of  
\\_making\\_racist\\_remarks/](http://archive.boston.com/news/world/latinamerica/<br/>articles/2010/12/15/martinique_man_convicted_of<br/>_making_racist_remarks/) (accessed 2018-1-13)
- [58] 前掲[57]参照.
- [59] ポール・トンプソン (酒井順子訳) 『記憶から  
歴史へ』 青木書店 2002 年.
- [60] 前掲[20] ファノン, 1998 年. 参照.
- [61] Choi, H. Kate and Tienda, Marta. “Marriage -  
Market Constraints and Mate - Selection Behavior:  
Racial, Ethnic, and Gender Differences in  
Intermarriage”. *Journal of Marriage and Family*.  
2017, 79 (2): pp. 301-317.
- [62] 前掲[36] Jones, 2014. 参照.
- [63] 前掲[1] Ito, 2006, 2016. 伊藤, 2018 年. 参照.
- [64] Brereton, Bridget. *A history of Modern Trinidad  
1783-1962*. Terra Verde Resource Centre: Trinidad.  
1981.  
Christine Barrow and Rhoda Reddock (eds.)  
*Caribbean Sociology*. Ian Randle. Jamaica. 2001.  
Stephenson, J. (2019), “Managing Diversity in  
Trinidad and Tobago”. *Diversity within Diversity  
Management*. 2019, 21: pp. 281-304.

---

### Abstract

---

This study explores the issue of white identity defined as European-descended white, in the Caribbean island of Trinidad, and examination of what makes people consider themselves “white” and different from no-white “others”, and what constitutes their whiteness in relation to non-whites. In August 2017 and February 2018, oral history interviews were conducted in Trinidad with adult participants who consider themselves white and who are considered white by other whites. The stories shared by the participants suggest 1. Awareness of the differences in physical features and social class from non-white “others”, 2. enforced-awareness of responsibility and accountability for slave trades and slavery in the colonial days, and 3. harassment and bullying by non-white “others” based on the difference in physical features and the colonial “sin” as slave owners, are the elements that contribute to the construction of white identity as European-descended white in Trinidad.

---

(受付日 : 2019 年 8 月 23 日, 受理日 : 2020 年 6 月 22 日)

**伊藤 みちる (いとう みちる)**

現職 : 大妻女子大学国際センター

英国ウォーリック大学大学院 カリブ海地域研究所. 専門は旧英領カリブ海地域におけるポストコロニアル社会の社会問題や社会経済開発. ジャマイカ, トリニダード・トバゴ, ガイアナ等, カリブ海地域での延べ 10 年間に亘る駐在生活で見聞した問題を中心に研究している.